

幼稚園・保育所等における保護者への情報発信方法の検討（2） －コロナ下における感染対策と家庭との連携－

杉江 栄子* 新美 洋祐** 古橋 さつ子*** 新井 美保子****

* 卒業生

** 安城市立ゆたか保育園

*** 保育の実践と研究・安城の会

**** 幼児教育講座

Transmission of Information to Parents of Children in Kindergartens and Nursery schools (2): Infection Prevention and Cooperation with Parents during the COVID-19

Eiko SUGIE*, Yosuke NIIMI**, Satsuko FURUHASHI*** and Mihoko ARAI****

*Graduate, Aichi University of Education

**Yutaka Nursery school, Anjo 446-0025, Japan

***Association of Childcare Practice and research in Anjo

****Department of Early Childhood Education, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

I. 問題の所在と研究目的

2020年初頭からの新型コロナウイルス感染症（以下、コロナと記載）の世界的感染拡大は、従来通りの保育の実施を困難にし、保育現場や家庭においても大きな混乱をもたらした。目に見えない新型コロナウイルスへの感染予防対策として、2020年3月から5月には、学校の休校措置に伴い多くの幼稚園で休園になったり、保育所等でも登園自粛になったりした。このような長期の休園・登園自粛は近年例がなく、乳幼児の発達への影響や家庭での子育てへの負担増が懸念される中、園側も様々に試行錯誤し家庭との連携が図られた。また、登園が可能となった後は、国からの感染対策の方針が示されるものの、誰もが未経験の中、想定外の状況で園の実情に合わせて何をどこまですればよいのか確信が持てないまま、今でも様々な試行錯誤が続いている。

もとより保育の場は集団生活であり、乳幼児同士や保育者と乳幼児間でスキンシップを含めた関わりも多く実施されている。お互いの顔を見て話したり気持ちを語り合ったり、親しく関わり合ったりすることが発達上も不

可欠な中で、密集・密接を避けることは事実上不可能に近い。また、換気により密閉は解消するとしても、気候や気象条件によっては難しい場合も考えられる。

これら密集・密接・密閉の3密を避けることは、日常の保育場面だけではなく、保護者を含めた様々な園行事の見直しにも波及しており、保護者にも戸惑いや不安が生じているのではないかと予想される。

このようなコロナ禍の中で保育を実践する際、園側から衛生管理や感染症対策に留意した生活や遊びの工夫などの情報発信は、保護者や家庭、地域社会との連携に重要な役割を果たすと考えられる。我々はこれまでの研究を通して、園からの情報発信に関して、保護者が関心を持つ内容を明らかにするとともに、発信方法として写真等を活用した園での様子の視覚化や保育の意図、発達過程を伝えることが求められていることを明らかにしてきた¹⁾。しかし、コロナ禍という想定外の状況で、従来通りの保育の実施が困難となるだけではなく、前述のように場合によっては休園も迫られる事態となった。そのような中でこそ、感染防止対策等の園の日常的な取り組みを発信することで、保護者の信頼を得て、保護者自身が安心して安定

した生活を送ることが、家庭を基盤とする乳幼児の生活にとって必要と考える。また、園においてもこれまで通りの乳幼児本来の発達が得られるよう、乳幼児の育ちを支える工夫について保護者と共有するなど、園と家庭との連携を強化したいと考える。

一方、保護者はその実施状況に対してどのように感じているのか、また現状の実施状況、情報発信で満足しているのかは計り知れない。

そこで本研究では、園長と保護者を対象とした調査から、コロナ禍の状況下での感染対策及び保育のあり方と家庭との連携について、情報発信の視点から現状と課題を探ることを目的とする。

II. 研究方法

1. 調査概要

(1) 調査目的

コロナ禍の状況下で、保育施設における感染対策や行事、保護者への情報発信内容・方法等について、園の実施状況と保護者の意識を探り、園と保護者の意識の違いや今後の課題について明らかにする。

(2) 調査対象

愛知県西三河地域全10市町の公立園を中心とする愛知県内12市町の公私立100園（幼稚園、保育所、及び認定こども園・幼保一体化施設（以下、認定こども園と表記）の園長及び保護者（各園2名）を対象に、質問紙を配布。

回答者数は園長91名（回収率91.0%）、有効回答数も91名である。保護者は180名（回収率90.0%）、有効回答数も180名である。所属の内訳は表1、2の通りである。

表1. 回答者（園長）の属性

	幼稚園	保育所	認定こども園	計
公立園	8	42	27	77
私立園	6	5	3	14
計	14	47	30	91

表2. 回答者（保護者）の属性

	幼稚園	保育所	認定こども園	計
公立園	16	83	54	153
私立園	11	10	6	27
計	27	93	60	180

(3) 調査方法

公立園（10市町）には市町役所を通じて調査用紙の配布を依頼し、私立園には直接園宛に調査用紙を郵送し、回答後は各園から返送していただいた。

(4) 調査実施時期：令和2年11月～12月

(5) 倫理的配慮

質問用紙に目的及び回答は匿名として個人情報特定されないように回収・分析することを明示して、自由意志による協力を依頼し、提出をもって承諾とした。

2. 調査内容

(1) 園長対象の調査内容

- ① コロナに対する感染対策の現状
- ② コロナ禍の状況下における保護者への情報発信内容と方法
- ③ コロナ禍の状況下における園行事等の取り組み
- ④ コロナ禍と子ども・保護者・職員の課題

(2) 保護者対象の調査内容

- ① 園のコロナに対する感染対策への意識
- ② 緊急事態宣言下の登園状況及び自粛期間中の生活状況
- ③ コロナ禍の状況下における保護者が求める保育及び行事等のあり方
- ④ コロナ禍の状況下における保護者が求める情報発信

III. コロナに対する感染対策の実態と保護者意識

1. 園における主な感染対策

園内での感染対策として考えられる28項目に対し取組状況を尋ねたところ、【図1～3】の通りとなった。

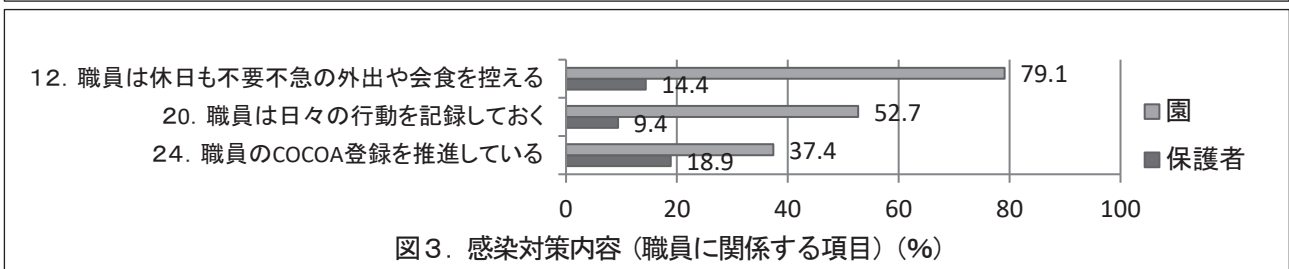
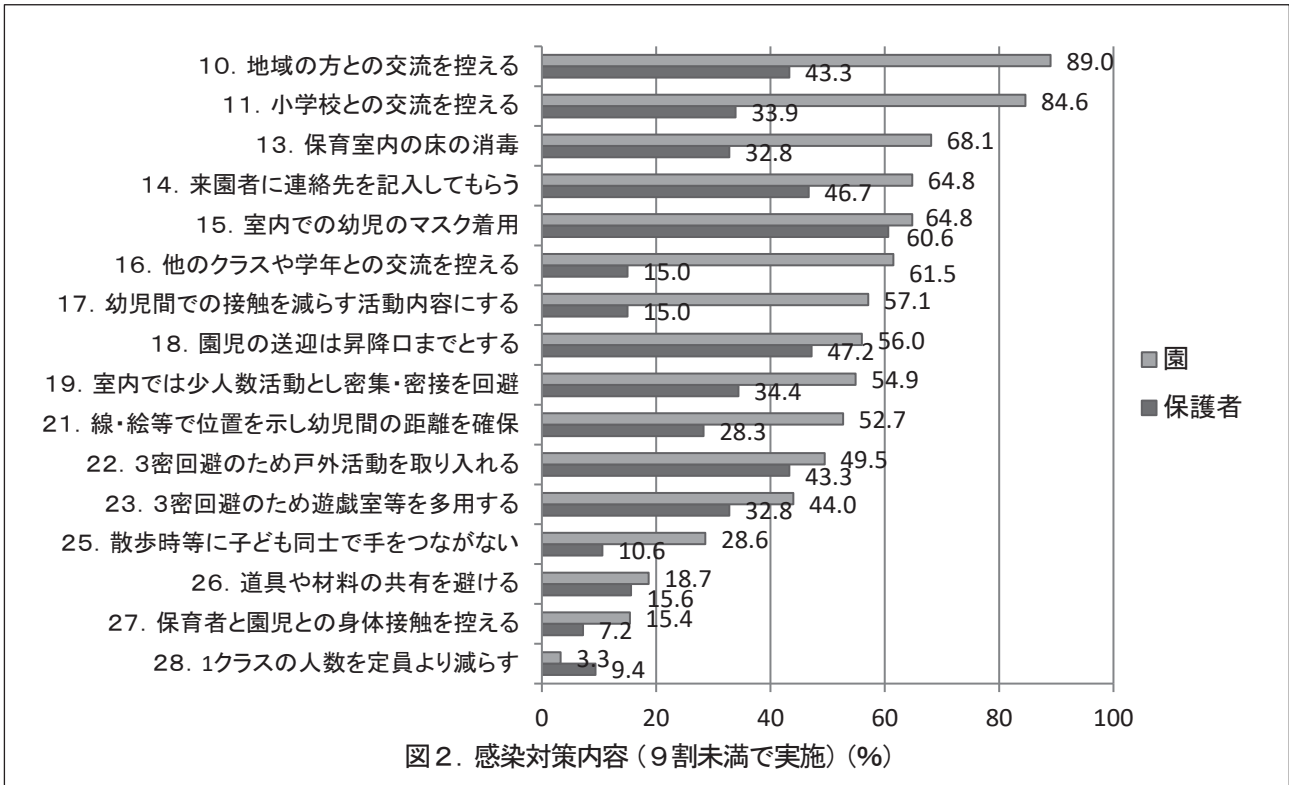
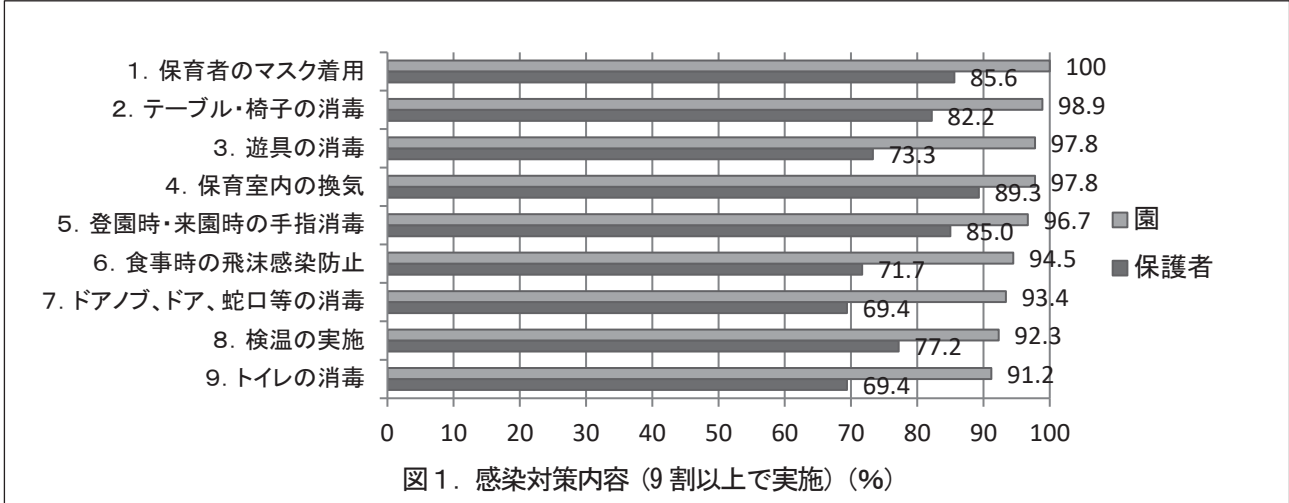
【図1】には対策として9割以上の園で実施されている項目（9項目）を表示した。全28項目中最も実施率が高かった項目は「1. 保育者のマスク着用」で100%、次いで「2. 保育室のテーブル・椅子の消毒」98.9%、「3. 保育室内の遊具の消毒」97.8%、「4. 保育室内の換気（原則として常時扉や窓を開けて保育する）」97.8%、「5. 登園時・来園時の手指消毒」96.7%、「6. 食事時の飛沫感染の防止」94.5%、「7. 保育室周辺のドアノブ、ドア、水道の蛇口等の消毒」93.4%、「8. 検温の実施」92.3%、「9. トイレの消毒」91.2%の順であった。

これらについて実施状況を詳細に尋ねたところ、「1. 保育者のマスク着用」では、保育者は飛沫予防として、マスク98.9%、マウスシールド20.9%、フェイスシールド11.0%を着用（複数回答）しており、この時期、様々に試行錯誤しながらも通常のマスク着用が一般的であったことがわかる。「2. 保育室のテーブル・椅子の消毒」の頻度は、【図4】に示した通り、実施園においては毎日95.6%、週3回以上2.2%、週2回以下2.2%である。同様に「3. 保育室内の遊具の消毒」も毎日が80.9%、「7. 保育室周辺のドアノブ、ドア、水道の蛇口等の消毒」も毎日89.4%、「9. トイレの消毒」も毎日96.4%と高率である。従って、これらの項目は9割以上の園で実施されている上にほぼ毎日消毒作業がなされていることから、これらが消毒業務の基本であることがわかる。

その中で【図2】に掲載した「13. 保育室内の床の消毒」の頻度は毎日 74.2%、週 3 回以上 6.5%、週 2 回以下 19.4%であり、判断が分かれる項目であると言える。以上の通り、保育の実施のためには様々な消毒作業を行わざるを得ない現状があり、保育者が日常の保育準備に加えて消毒作業に追われている状況が懸念される。誰がどのような方法・時間帯等で消毒作業を担当することが適切であるか、引き続き明らかにしていく必要があるだろう。

「5. 登園時・来園時の手指消毒」の対象は、調査全園で園児 64.8%、保護者 83.4%、保育者 73.6%、園外者 86.8%であり、園児よりも、園に出入りする大人の消毒の比率が高い。設置場所は昇降口・玄関 74.7%、職員室 53.8%、保育室 45.1%、正門付近 16.5%の順で多く、保育室入室前に対策が取られていることがわかる。

なお、「15. 保育室内での幼児のマスク着用」状況は全体の 64.8%に留まっている。その中で着用年齢は、2歳



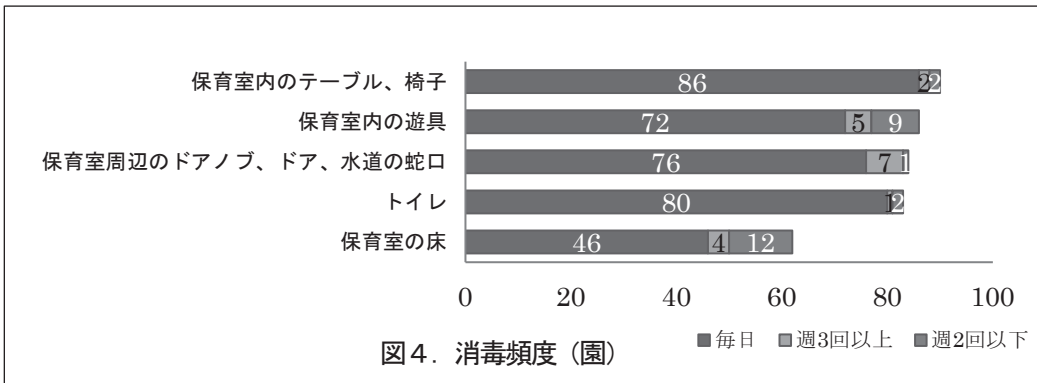


図4. 消毒頻度 (園)

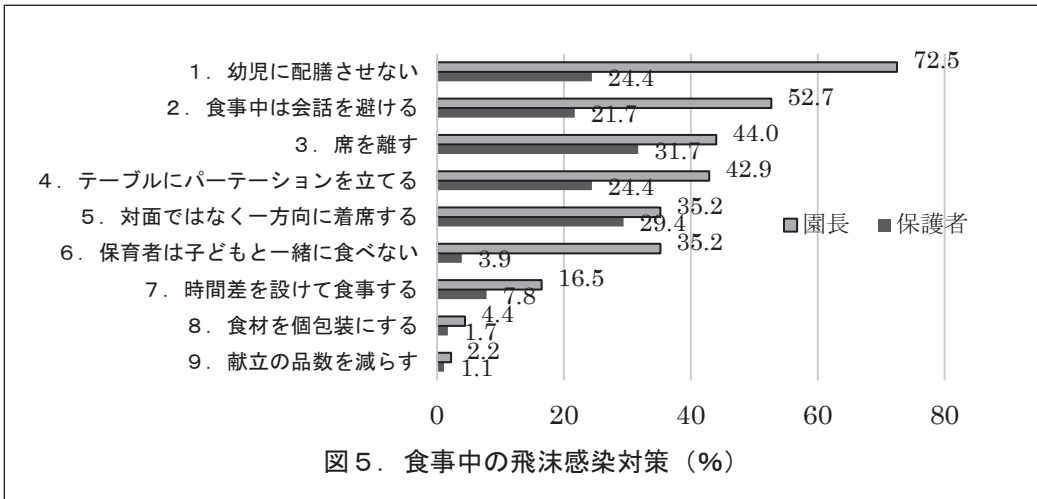


図5. 食事中の飛沫感染対策 (%)

児以上1.8%、3歳児以上91.1%、4歳児以上5.4%である。このように着用する場合はほとんど3歳児以上で実施されており、呼吸やマスクの始末など年齢や育ちを考慮した取り組みになっていると考える。

2. 食事中の飛沫感染対策

「6. 食事中の飛沫感染の防止」の具体策としては、【図5】に示した通り調査全園では、幼児に配膳させない(72.5%)が最多であり、次いで食事中は会話を避ける52.7%、席を離す44.0%、テーブルにパーテーションを立てる42.9%、対面ではなく一方向に着席する35.2%、保育者は子どもと一緒に食べない35.2%、時間差を設けて食事をする16.5%という状況であった。このことから食事場面では、感染防止対策に限られた広さ・予算・設備等の中で様々に工夫されている状況がわかるが、反面で制約も多く、食事は会食の雰囲気ではなく、集団にいながら個別に食事をするような状況であることがわかる。その他、食材を個包装にする4.4%、献立の品数を減らす2.2%もみられるものの取り組みとしては少ない。

3. 密接・密集回避の取り組み

密接・密集を避ける取り組みとしては、「17. 幼児間での接触をできるだけ減らすような活動内容にする」57.1%、「19. 室内での活動は少人数グループにする等、幼児の密集、密接をさける」54.9%、「21. 幼児が並ぶ位

置を線、絵等で示し、幼児間の距離を確保する」52.7%など、それぞれ5割強の園で実施されている。このように保育室という生活空間において、幼児の行動や保育内容に関わる部分においても制約が生じていることがわかる。

なお、幼児同士の接触に関しては、散歩や屋内での移動場面等で「25. 子ども同士が手をつながないようにする」15.4%、「26. 道具や材料の共有を避ける」18.7%と低い。感染防止策であっても、子どもの育ち

から必要な一定の日常は保たれていると察する。

一方、保育室外の活用については「22. 3密回避のため戸外活動を取り入れる」49.5%、「3密回避のため遊戯室等を多用する」44.0%と半数に届いていない。

また、地域との連携・交流については、「10. 地域との交流を控える」89.0%、「11. 小学校との交流を控える」84.6%が8割以上に及んでおり、園外とのつながりや関わりが困難な状況にあることがわかる。幼児の成長・発達に必要な活動をどのように保障していくか、取り組みの工夫が求められる。

4. 園の感染対策に対する保護者の意識

園の感染対策の取り組み状況について知っているかどうか保護者に尋ねたところ、保護者の95.5%が「十分知っている・知っている」と答えた。「あまり知らない・知らない」は4.5%だった。感染予防の取り組みの満足度では、「満足している」68.7%で、「やや満足している・少し不満・不満である」が合わせて31.3%だった。肯定的な回答が高数値であることから、感染対策について園から十分情報提供され、感染対策にも満足している様子がうかがえる。

具体的な感染対策として園に実施を望む項目は前述の【図1～3】に示した通りである。1位が「4. 保育室内の換気」89.3%、2位「1. 保育者のマスク着用」85.6%、3位「5. 登園時・来園時の手指消毒」85.0%、4位「2. 保育

室内のテーブル・椅子の消毒 82.2%、5位「8. 検温の実施」77.2%、6位「3. 保育室内にある遊具の消毒」73.3%、7位「6. 食事の飛沫感染防止」71.7%、8位「7. 保育室周辺のドアノブ、ドア、水道の蛇口等の消毒」及び「9. トイレの消毒」69.4%であった。これら9項目はほぼ7割以上の保護者が望んでいるとともに、園長調査で既に9割以上の園で実施済みであることがわかっている。

これらに続く項目は10位「15. 保育室内での幼児のマスク着用」60.6%で、その他の18項目は全て5割未満と低い結果になった。これらの結果から、保護者が希望し園でも実施されている上位9項目と、保護者回答10位の「保育室内での幼児のマスク着用」を合わせた10項目が、園での実施が望まれる基本的な感染対策と言えるだろう。

消毒に関わる項目の中では「13. 保育室内の床の消毒」が実施率68.1%、保護者希望32.6%で、他の消毒関係項目と比較していずれも高くない。床の消毒の必要性は判断が分かれるところと言え、科学的根拠に基づき検討する必要がある。

なお、7位「食事の飛沫感染防止」の具体的方法について保護者は、【図5】に示した通り、席を離す31.7%、一方向に着席する29.4%、食事中は会話を避ける21.7%、テーブルにパーテーションを設置する24.4%、幼児に配膳をさせない24.4%等（n=180）であり、園長の回答と比較すると全体的に低いことがわかる。特に「幼児に配膳させない」「食事中は会話を避ける」「保育者は子どもと一緒に食べない」の項目は差が大きい。これらが効果的な感染対策かどうか、子どもの成長・発達を保障する視点からも改めて検討することが必要であろう。また、保護者への

適切な説明も求められるところである。

全体の11位以下で同様に保護者の意識と園長回答との差が見られた項目は、「10. 地域の方との交流を控える」（45.7ポイント差）、「11. 小学校との交流を控える」（同50.7）、「16. 他のクラスや学年との交流を控える」（同46.5）、「17. 幼児間での接触を減らす活動内容にする」（同42.1）などの人との交流に関わる項目である。これらは人間関係の育ちや社会経験、多様な活動内容等にも関わる項目であり、感染対策として交流を回避したいとする保護者は比較的少ないことがわかる。それでもなお「27. 保育者と園児の接触(抱っこする、膝に乗せる、握手をする等)をできるだけ控える」7.2%等、保育者からの感染拡大を懸念する保護者の不安も少数ながら一定数あることが読み取れる。

職員に直接関係する項目でも保護者の希望は「12. 職員は休日も不要不急の外出や会食を控えて欲しい」14.4%、「20. 保育者には日々の行動を記録しておいてほしい」9.4%、「24. 保育者にはCOCOAに登録しておいて欲しい」18.9%などいずれも低く、園長回答との差が大きく見られる。

これら28項目中、唯一保護者の願いが園長回答を上回った項目は「28. 1クラスの人数を定員より減らす」（園長3.3%、保護者9.4%）である。回答自体は共に低いものの、保護者の意識に園側が追いついていないとも考えられる。密集・密接を避ける方策として小学校でも定員数の見直しがなされたことを踏まえると、保育現場でも検討する必要があるのではないだろうか。関連して「22. 3密回避のため戸外活動を取り入れる」や「19. 室内では少人数活動とし密集・密接を回避する」「23. 3密回避のため遊戯室等を多用する」も保護者の回答は全体で各々13位、16位、17位といずれも園長回答よりも順位が高く、3密回避の基本的な対策として園でも検討する必要があるのではないだろうか。

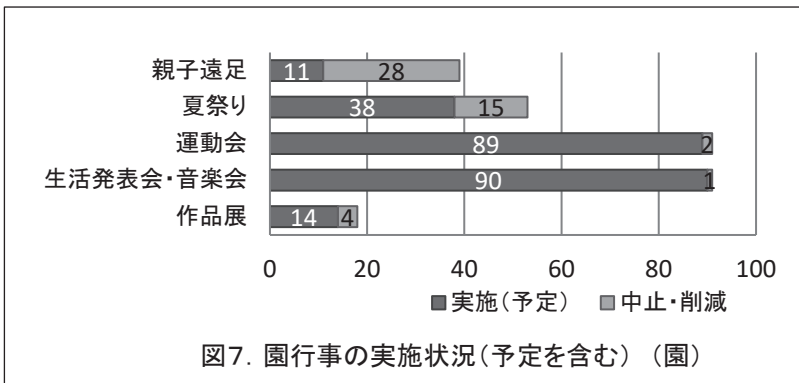
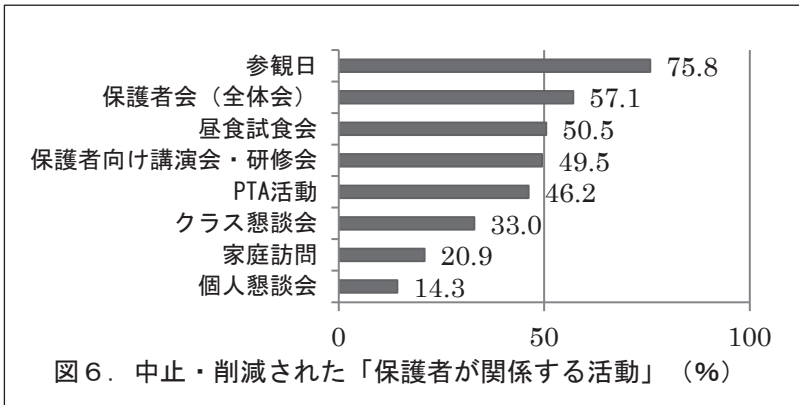
その他の自由記述3.9%の中には、「定期的な業者の消毒」との回答もあった。

その他の自由記述3.9%の中には、「定期的な業者の消毒」との回答もあった。

IV. コロナ下における園行事の状況と保護者意識

1. 保護者が関係する園行事等の変更

保護者が関係する活動等で2020年度に中止や削減された割合は、【図6】に示した通り、参観日75.8%、保護者会（全体会）57.1%、昼食試食会50.5%、PTA活動46.2%、クラス懇談会33.0%等であった。これらの活動等の中止・削減は、子どもたちの園での様子を見聞きし難くなった



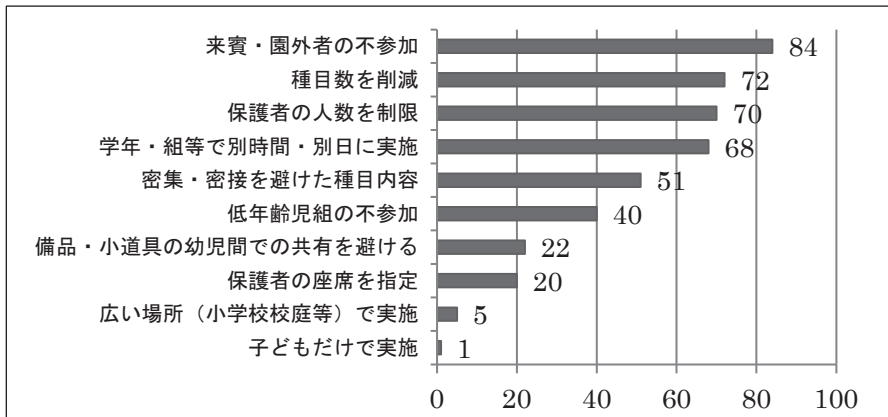


図8. 運動会実施上の工夫（園）

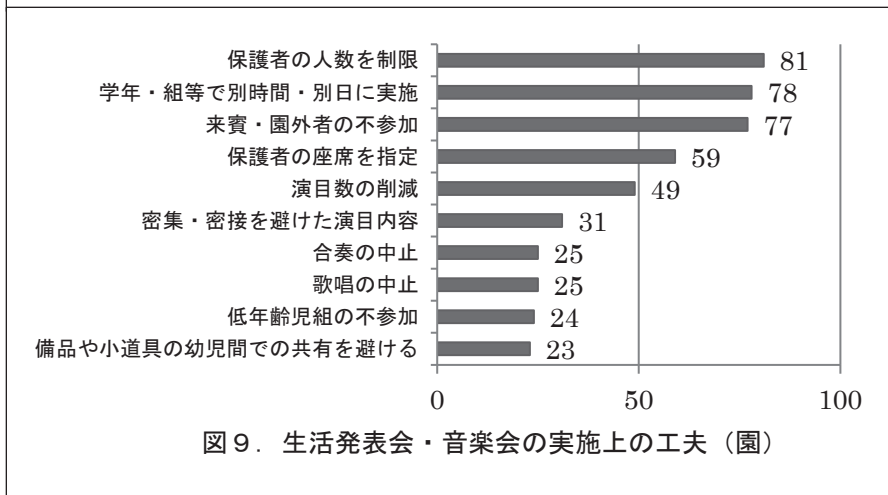


図9. 生活発表会・音楽会の実施上の工夫（園）

けでなく、保護者同士が情報交換・交流する機会も減少していると察する。一方で、これら中止・削減された活動をオンラインでの実施に変更したものは、「ある」2.2%、「ない」93.4%との回答であった。オンラインでの実施について保護者からは「オンライン配信日以外でも見られて良かった」「行事に参加できない人も見られるので大変よかった」「PTAのサークル活動（合唱、絵本サークル）をオンラインで行った」「参観日は無くなったが、動画により自然な園生活を見られて嬉しかった」等の感想が出された。一方、保育者からは「オンライン環境が整っていないので実施は難しい」との意見も出された。今後はオンライン化に向けて整備を進め、保護者ニーズに応えながら園と保護者がつながっていく工夫が求められる。

園行事の変更状況は【図7】の通りである。運動会は実施（予定を含む）が97.8%であり、2020年秋からは工夫しながらほぼ全ての園で行事が本格的に再開され始めたことがわかる。運動会実施上の工夫点としては、【図8】に示した通り、調査全91園中、来賓・園外者の不参加92.3%、種目数を削減79.1%、保護者の人数を制限76.9%、学年・組等で別時間・別日に実施74.7%などの工夫がされている。生活発表会・音楽会は98.9%の実施であり、工夫点としては【図9】に示した通り、保護者の人数を制限89.0%、学年・組等で別時間・別日に実施85.7%、来

賓・園外者の不参加84.6%、保護者の座席を指定64.8%などの配慮がされている。一方、歌唱の中止27.5%、合奏の中止27.5%、密集・密接を避けた演目内容34.1%等、子どもに直接関わる活動内容の削減は低率に留まっており、感染防止対策より教育内容を重視して行っている状況がうかがえる。

2. 園行事等の変更に対する保護者意識

園行事等の変更・中止に対する保護者意識は、「やむを得ない」が8割程度を占めた（親子遠足83.3%、夏祭り80.0%、運動会80.3%、生活発表会・音楽会78.9%、作品展92.9%）。「本来の方法で実施してほしい」は5%程度、「もっと工夫してほしい」も5%以下の回答であったことから、多くの保護者が園の中止・変更の判断を理解し受け入れていると言える。

また、コロナ禍により「園と保護者」及び「保護者同士」のつながりの変化について保護者に尋ねたところ、「園と保護者」のつながりが「少なくなった・やや少なくなった」は32.8%、「変わらない」62.2%、「つながりが増した」2.8%であった。また、「保護者同士」では「少なくなった・やや少なくなった」は50.0%、「変わらない」46.1%、「つながりが増した」2.8%であった。一方、園長の認識では、「園と保護者」のつながりが「少なくなった・やや少なくなった」は31.9%、「保護者同士」は39.6%であり、特に保護者同士のつながりについての認識が保護者回答よりも低い。つながりが「少なくなった・やや少なくなった」との保護者の意識が「園と保護者」で1/3、「保護者同士」で半数に達していることを園は課題と捉え、保護者支援の一層の工夫をしていく必要がある。

V. 緊急事態宣言下での生活

1. 緊急事態宣言下での登園状況

2020年3～5月の第1回緊急事態宣言下における登園状況は、「通常と変わらない園児数が登園」3.3%、「半数以上の園児数が登園」22.0%、「半数未満の園児数が登園」60.4%（認定こども園における1号認定児の休園を含む）

であり、完全な「休園」はわずか8.8%であった。

保護者回答で具体的に登園状況を分析すると、緊急事態宣言下では「登園しなかった」「休園だった」の合計53.9%の園児が自宅生活を送ったことが分かった。また、幼稚園児は①通常通り登園した3.7%、②できるだけ控えた7.4%、③登園しなかった33.3%、④休園だった55.6%との回答に対して、保育所・認定こども園児は、①22.9%、②28.8%、③36.6%、④11.1%であった。この結果から、幼稚園と保育所・認定こども園の登園状況には差があり、明らかに保育所・認定こども園の保護者の方が、就労形態等の理由から都合がつかず、園が開園していないと困る家庭が多いことが読みとれる。また、保護者からは「園が休園になると退職をせざるを得ない」とする意見の一方で、「休みやすくなるので休園にしてほしい」という両極端の意見も出された。

登園した保護者(n=82)からは、登園することに①とても不安だった6.1%、②不安だった46.3%、③あまり不安でなかった39.0%、④不安ではなかった6.1%と回答があり、過半数の52.4%の人が不安を抱えながら登園させていたことがわかる。実際に登園してみた感想としては、①良かった58.5%、②良くなかった2.4%、③どちらともいえない39.0%であり、良かったとする回答が高数値を示した。理由としては(複数回答)①感染予防が十分にされていた52.4%、②子ども的人数が少なくて落ち着いて遊べた36.6%、③子どもが先生とよく関わった19.5%等であり、感染予防や子どもへの配慮が十分にされていた様子がうかがえる。一方で、「クラスや学年合同で保育がされていた」12.2%、「担任以外の先生に保育

されることがあった」6.1%という意見もあり、「どちらともいえない」とする回答につながったことが考えられる。

2. 自粛期間中の家庭生活と今後の登園希望

「登園をできるだけ控えた・登園しなかった・休園だった」と回答した79.4%の保護者(n=143)に、自粛期間中の家庭内の様子について複数回答で尋ねたところ、【図10】の通り①親子や家族で一緒に過ごせてよかった65.0%、②子どもとよく話げできた52.4%、③日頃できなかった活動に家族で取り組めた45.5%と肯定的な回答がある一方、【図11】のように①子どもはテレビやゲーム、スマホ等に接する時間が増えた60.1%、②食事の用意や家族の世話で疲れた50.3%等の他、きょうだい間や家族のいざこざが多く困った、親の自分の時間が持てずに(一人になれず)ストレスがたまった、テレワークとの両立が困難だった等、普段と違う生活様式になってしまったが故の悩みもあった。

「今後感染が拡大した時に登園したいか」との設問に対して幼稚園保護者は①登園させたい29.6%、②時々登園させたい40.7%、③登園させたくない11.1%、④休園にしてほしい18.5%と、登園させたい割合が大幅に増えた。保育所・認定こども園保護者も①25.5%②32.0%、③21.6%④13.7%と微増だった。また登園させることがとても不安だった、不安だったの回答者も実際に登園してみて、今後感染拡大した場合①30.2%②32.6%③16.3%と登園させたいの回答が増えた。さらに登園しなかった人も①12.3%②33.8%③36.9%④12.3%と、①②を合わせると46.1%と半数近くの保護者が少しは通わせたいと考えが変わったことが分かった。

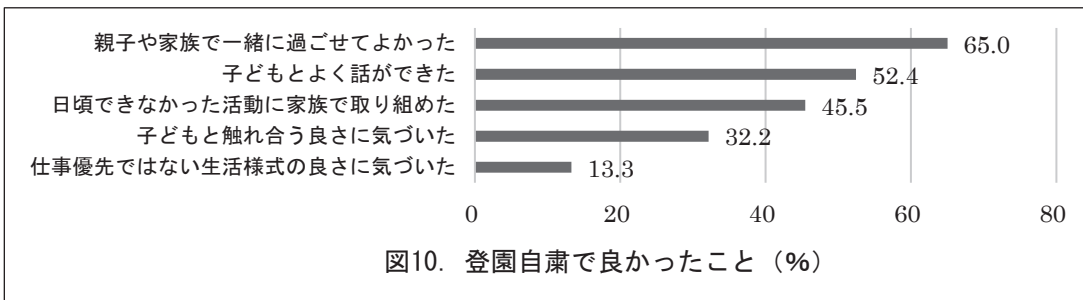


図10. 登園自粛で良かったこと (%)

えが変わったことが分かった。これらの保護者の心境の変化の背景には、園での感染症対策が十分に実施されて

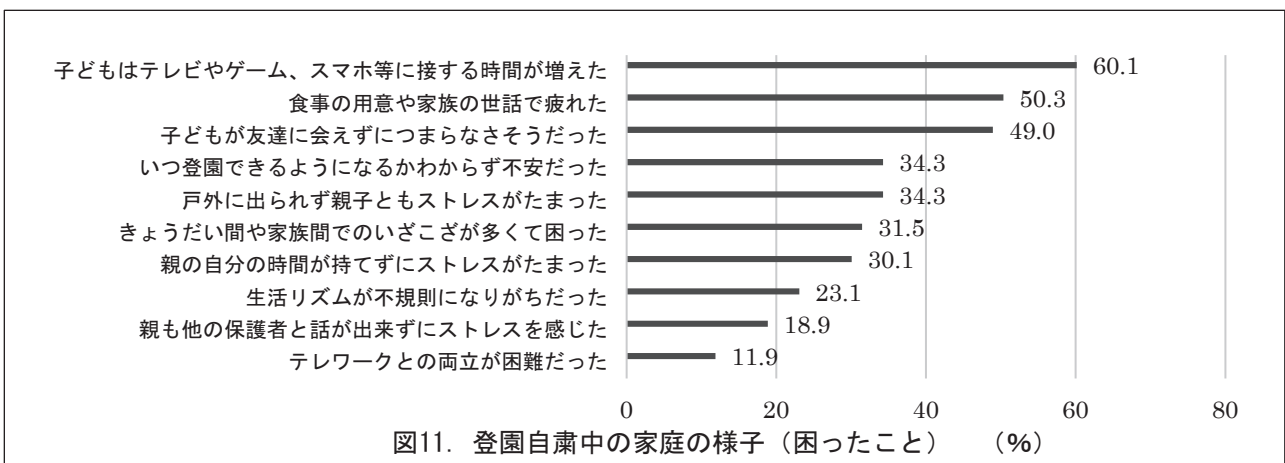


図11. 登園自粛中の家庭の様子(困ったこと) (%)

いることからの変化、また、自粛生活が大変だったことによる気持ちの変化があると考えられる。

3. 家庭で取り組める遊びや活動の提案

外出自粛期間中に家庭で取り組める遊びや活動について、園から具体的な提案はあったか尋ねたところ、あった16.1%に対し、あまりなかった27.8%、全くなかった53.3%と、園からの提案は限られていた。園長回答でも、「よく伝えている・時々伝えている」24.2%に対し「あまり伝えていない・全く伝えていない」74.7%と、園からの発信は重要視されていない。

その中で実施された、家庭で取り組める遊びや活動についての具体的な提案例としては、親子触れ合い遊び、クッキングレシピ、制作やボードゲーム、絵本、歌、散歩コースの紹介の他、市内の保育者で手洗いを進める動画やオリジナルの体操をYouTubeにアップした取り組み等が挙げられた。制作については、キットを配布し、すぐに活用できる手立てを工夫している園もある。また園からの毎週の通信やPTAからの通信をホームページに掲載した園や、園と家庭とのラインを設定して毎日配信した園もある。手洗いの仕方については、園で行っている手遊びとして紙面での紹介、その他掲示による情報発信もしている。このように、園は、配布プリント、掲示、動画等の情報配信を行い、家庭で健康的で楽しく過ごす方法のヒントを紹介していることがわかった。

これらに対する保護者からの意見・感想・子どもの様子としては、「新聞テントや手洗いの歌、手遊びなど大変助かったし、先生や園を感じられてよかった」「ダンスの動画をみんなで共有できて楽しかった」「園で踊っていた曲だったので嬉しそうだった」「You Tubeの配信で子どもは喜んで真似していた」「生活が崩れないようにみんなで決まった時間に運動した」「親子で取り組むことができて、お家時間も楽しく見通しを持って過ごすことができた」「説明がわかりやすく丁寧で参考になった」など、ダンスや歌、工作等を親子で楽しめた様子が保護者からの回答

で見られた他、園長からも「家庭内で意識して子どもたちがよく手洗いをするようになった」「家族の団らんが増えた」「普段やらないことが経験できた」などの様子が聞かれたことや「担任からの発信で子どもと保護者に親しみをもってもらえ喜んでもらった」等の回答があり、園からの情報が好評だったことがわかる。新入園児を含め突然の登園自粛状態に対し、市や園の先生方が少しでも子ども達の本来の生活や教育を保障しようと、動画等の教材を作り配信・配布された様子がうかがえる。

VI. 保護者への情報発信

1. コロナ禍における保護者への情報提供内容

園での感染予防の取り組み内容について、保護者全員に「おたより」や「ホームページ」等で伝えることが「よくある・時々ある」は91.2%、「ほとんどない・ない」は8.8%である。取り組み状況を保護者に理解されているかの問いには、「十分理解されている・理解されている」89.0%であり、園は取り組み内容を伝えることに努めており、保護者におおむね理解されていると考えている。

また、コロナ禍に伴う保育活動の変化や工夫点についても同様に「よく伝えている・時々伝えている」が89.0%に達している。しかし、保護者回答では「よく知っている・知っている」が55.0%に留まり、「あまり知らない・知らない」が44.4%となった。これに関連して、園長にコロナ禍により子どもの発達上で配慮したい点を保護者に伝えるか尋ねたところ、「よく伝えている・時々伝えている」が56.0%に留まり、「あまり伝えていない・伝えることはない」が42.9%となった。調査時点ではコロナ禍の子どもへの影響はわかり難かったかもしれないが、懸念される子どもへの影響を保護者も一緒に考えるための情報提供が、あまり行われていないことがわかる。

そこで、感染症が流行した時に保護者に提供する必要がある情報は何かを園長に複数回答で尋ねたところ、【図12】の通り、①保護者が参加する行事の実施方法や園の考

え方89.0%、②園での予防の現状83.5%、③家庭で実施してほしい予防方法78.0%、④一般的な感染予防方法64.8%、⑤園での子どもの様子63.7%の順で多かった。一方で、家庭で実施できる子どもの遊びや活動について33.0%、家庭での過ごし方について30.8%、保護者の悩みと対処方法33.0%等、保護

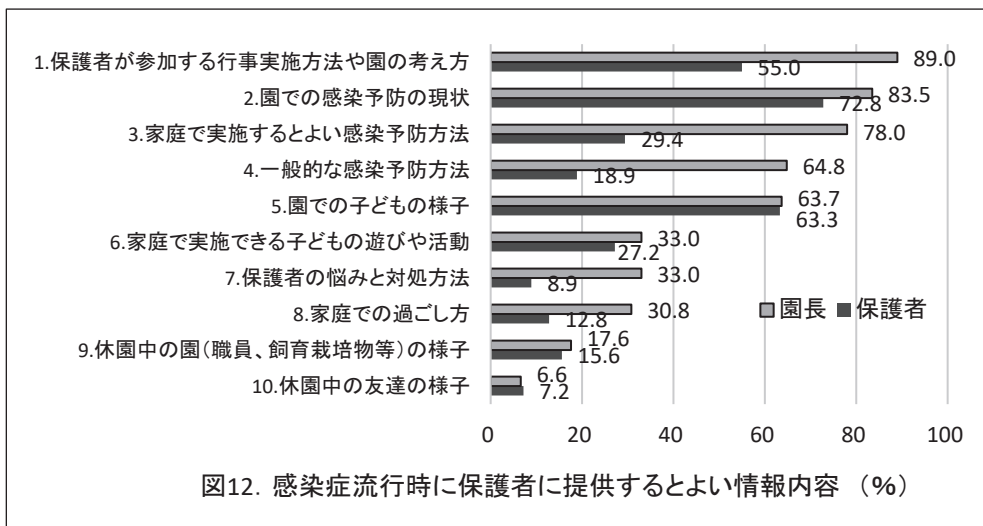


図12. 感染症流行時に保護者に提供するとよい情報内容（%）

者へのアプローチに対してはあまり重要視されていないと言える。

一方、保護者が園から感染症流行時に提供して欲しい情報としては、①園での感染予防の現状 72.8%、②園での子どもの様子 63.3%、③保護者が参加する行事の実施方法や園の考え方 55.0%が高く、多くの保護者が園生活に直接関わるこれらの情報を切に求めていることがわかる。その他の項目は3割未満と低い。しかし、前述した通り、例えば実際に家庭で取り組める遊びや活動の提案に対して保護者から好評だったことを考えると、その必要性に園側も保護者も気づいていないことが考えられる。図11に示された保護者の困り感や子どもの発達保障に伝えられるような情報提供内容の工夫が求められる。

なお、園長として「園児や保護者の様子で気がかりなこと」を自由記述で求めたところ、子どもについては、心の不安定さや甘えが増えた等の様子や、保育士のマスク着用により子どもが表情を読み取り難いこと、言葉やコミュニケーション、食事、歯磨き指導の難しさ、運動不足、園外保育の制限など、子どもの経験不足による発達の遅れを懸念する意見が出された。マスクをせずに過ごせる家庭や家族の役割は大きい。園と連携しながら子どもの育つ場としての充実を図る必要があるのではないかと。

2. 保護者への情報発信方法について

コロナ禍での状況下では、園独自で必要に応じて速やかに保護者への情報提供を行っていく必要があると考えられる。そこで、コロナ禍により、「おたより・お知らせ」の発行回数の変化を尋ねたところ「変わらない」が56.7%と過半数を占めた。また、発行回数やホームページの修正が園長の裁量でできるか尋ねたところ、可能である83.5%、市の許可が必要9.9%、できない5.5%との回答であった。

今後 ICT 機器を使用した情報発信方法（オンライン動画等）を取り入れたいかについては、積極的に取り入れたい4.4%、取り入れたい40.7%、あまり取り入れたくない27.5%、取り入れるつもりはない24.2%と、過半数の園で取り入れない考えであることがわかった。その理由としては、①園内に機器が整備されていない45.1%、②家庭により機器の環境整備が異なる42.9%、③個人情報やセキュリティ面で不安39.6%等であり、園だけの思いでは ICT 化を進められないと考えていることが明らかになった。一方、取り入れたい理由は、保護者への連絡手段として便利35.2%、保護者の都合のよい時間に見ることができる29.7%との回答があり、園は保護者からのニーズが一定程度あると捉えている。

実際の保護者回答では、今後デジタルやオンラインツールを「導入してほしい」62.8%、「導入してほしくない」33.3%であり、園の意向を超えた導入希望が出されてい

る。導入理由は、保護者が情報を取得する手段として便利、保護者が都合の良い時間に見ることができるであったが、この回答の中には、紙面を希望する保護者の回答も混在しており、状況に応じて保護者が選択できることの必要性もうかがえる。一方、導入してほしくない理由は、紙面の方がわかりやすい、機器操作に不慣れで時間がかかるだった。筆者らのこれまでの研究²⁾では、紙面希望が70%だったが本調査では54.4%と減少しており、ラインやメール、オンラインの急速な普及が要因として推測できる。

3. 園から保護者に発行配布された情報内容の分析

園長調査では、園から発行された「おたより」等も可能な範囲で提供を依頼したところ、6園(私立保育所・幼稚園、公立保育所・幼稚園・こども園等)から「おたより」「クラスだより」「PTAだより」等の提供を得た。「おたより」等の内容(主見出しを「」、内容を()で記載。ただし紙面の都合上短文表記有り)は以下の通りである。

- ①【A園】5/7「〇〇ホテルの新型コロナ感染症患者の受け入れにかかる地元説明会に行く」(内容説明、園の対応と今後の方針)、5/22「運営状況」(県対策室からの通知)、6/4「with コロナで保育園の今と今後」(園児の健康管理、職員の健康管理、今後の行事開催等)、6/23「患者受け入れ施設の廃止」(県からの通知)、11/27「コロナがまた感染拡大」(国からの通達と園方針・対策)の5回発行。毎号、園長視点で、軽症者受け入れ施設(ホテル)の近隣にある園として、現状と経過及び今後の園方針等を明文化することで、保護者の動揺や不安の軽減につながったと考えられる。また、業者消毒の実施の掲載もあった。
- ②【B園】4/24「今後の行事における新型コロナウイルス感染予防対策」(行事の中止や延期、検温カードの実施。外国籍保護者向けには、ふりがな添付版、翻訳版)、8/7「新型コロナウイルス感染症に対する連絡(子ども課通知)」「今後の行事」、12/22「今後の行事」の3回発行。外国籍保護者へも情報が正確に伝わる手厚い発信がされている。
- ③【C園】5/25「今年度に限り園便り+」(園便りに付け加えたたよりを創刊。行事中止変更、新型コロナウイルス感染予防対策、登園自粛中の園での出来事)、9/18「給食時の感染予防対策」(飛沫防止手作りパーテーション設置)「マスク着用」(戸外遊は外し、室内は着用。汚れることもあるので予備を持参)、11/25「ふれあい発表会のお礼」(受付での問診票記入、検温等実施)「保育室消毒の専門業者委託」(11/24より週2回3月まで、市より委託。今までは職員が1日2回消毒を実施)の3回発行。専門業者が実施する消毒は、保護者にとっては何物にも代えがたい情報であり、保育者が保育専念できることから保護者の安心につながる情報となっていると考えられる。
- ④【D園】5/29~11/27期間に7回発行。そのうち4回を紹介(発行日不明のため順不同)。「興味深いお話」(元国立

感染症研究所感染情報センターのコロナウイルス感染に関する記事を紹介)、「ゆっくりとゆったりと」(暑い日の外遊びはマスクを外す。Yahoo!ニュース JAPAN、子どものマスク着用を紹介)、「新型コロナウイルスって!?!」(岡山大学ホームページ『新型コロナウイルスについて一緒に考えよう』を紹介)、「健康であること」(『感染症を恐れない暮らし方』著書紹介)。園は、適宜記載内容に応じて発信元を紹介。また、たよりの発行毎に紙面中央の欄外に「家族そろって検温、手洗い体調管理の徹底」「手洗いマスクの着用、体温表記入」「家族そろって健康管理」等その他の標語を記載。保護者にとって、記載内容の発信元の明確化は園への信頼の構築につながるのではないだろうか。欄外の有効活用も参考になる。

⑤【E園】9/9「新型コロナウイルス感染症における給食費助成額の振込口座の確認(依頼)」(助成の対象となる給食費等、別紙振込先口座届出書の記載、振込予定日)、10/27「新型コロナウイルス感染症発生時の園の対応(通知)」(新型コロナウイルス感染者が発生した場合、臨時休園期間中の保育料や給食費の取扱い)の2回発行。保護者に不可欠な情報発信がされている。

⑥【F園】11/9 クラスたより「立体マスクの作り方」(材料と実物大型紙)「お家で楽しむすごろく」(コロナ禍で外出自粛中あっても家族で楽しい経験の一助)、12/22「冬休みの生活」(マスク着用、三密回避。園児や家族がコロナウイルス感染症にかかった場合は園への連絡と方法)。2回発行。家庭での製作や楽しむ提案が掲載されている。

以上の結果から、多岐に渡った様々な事項の記載が「おたより」を通して、適宜保護者に発信されていることが分かった。保護者の不安軽減のために、事後発信ではなく園の新型コロナウイルスへの対応の実際や園の方針を明文化し伝えることや、情報元を明確にして発信することが重要であると言える。前述Ⅲ-4で保護者は園の感染拡大防止対策の取り組み状況を95.5%が「十分知っている・知っている」と答えているが、これは園が発信した「たより」を通して得られた保護者からの信頼の結果と推測することができる。

Ⅶ. 全体考察

感染症予防対策について、園は手指や物、場の消毒等、生活面だけでなく、遊びや活動、行事について子どもの成長発達を保障しつつ、様々に工夫していることがわかった。また、このような対策について、園は保護者への情報発信に努めており、保護者もその取り組み状況を知って満足していることが分かった。

一方、コロナ禍でこれまで通りの生活ができなくなっている中で、保護者の子育てへの不安が高まっている。園行事の中止や削減により、保護者同士が気持ちや情報を

共有する場も減り、孤立感を深めたり親子共にストレスが高まっていたりする回答が見られた。社会が不安定であるからこそ、これまで以上に園が家庭と共に幼児自身の子育ちを一緒に応援していく必要がある。園は、園と保護者、保護者同士のつながりのためにも情報内容の充実と、発信方法の工夫が求められる。例えば、保護者からはデジタル機器やオンラインツールの導入を望む意見が2/3に及んでいる。今後は、必要な情報量をタイムリーに視覚的にわかりやすく発信するためにも、園行事場面を含めて活用を考え、園もICT機器の環境整備と発信技術の習得に努めることが必要だろう。

また、保護者が求めている発信内容は、今回のコロナ禍では子どもを取り巻く園生活での感染予防対策やその現状、園での子どもの様子、取り組んでいる遊びの工夫や予防対策の実施内容や方法等であった。園は、保護者は知っているだろう、気づいているだろうではなく、園としての努力や工夫を具体的に発信し、“園としての”考えを“園側”から積極的に伝えていくことが、保護者の安心感に繋がり、結果として保護者の感染予防対策の理解や協力が得られ、信頼も深まり、園と保護者との連携強化に繋がるのではないかと考える。

コロナの感染終息は難しく、今後も保護者のニーズに合わせた、紙面・メール・ライン・電話等多種の発信方法を活用して、園児を取り巻く感染予防対策等を保護者に伝え続けて行くことが最重要課題と考える。そのためにも、感染予防対策の工夫の現状を迅速・的確に適切な方法で発信するための人材(事務専門職)の増員が必要であると考え。また、今後感染が拡大しても登園させたいと考えている保護者の割合が大幅に増えていることが本調査でわかった。この結果から、従来通りの子どもの人数に対し今まで通りの子どもの育ちを保障しつつ、今以上の感染対策業務を保育者が行う場合は、激務から保育が困難になることも予想される。感染症拡大防止対策を保育者が保育業務内で行うのではなく、日々の清掃消毒業務を他機関、他業種に委託し、保育者としての専門性を確保すると共に、保育の場での密集を低減させるためにも、1室当たりの子どもの定員数の削減や、遊戯室や園庭による広い空間の確保が喫緊の課題であると考え。

引用文献・参考文献

- 1) 2) 大橋琴美、他(2020)「保護者への情報発信方法の検討(2)―発信方法と目的―」日本保育学会第73回大会発表論文集
・ベネッセ教育総合研究所(2020)「変わる保育変わらない保育」これからの幼児教育・秋号